

シーズン・オープニングで 細川俊夫を初演

9月14日、チューリヒ・トーンハレ管弦楽団の第154シーズンが始まった。今年のCreative Chairである細川俊夫を招き、トーンハレ管とオーケストラ・アンサンブル金沢が彼に共同委嘱した「フルートとオーケストラのための《セレモニー》」が世界初演された。この曲を捧げられたエマニュエル・パユも今年のフォーカス・アーティストで、スイス人とは思えない日本的な音色をフルートで表現したが、異空間にワープするような20分のこの曲を理解し、賞賛したスイスの聴衆にも驚いた。後半はトーンハレ管が取り組んでいるブルックナー・ツィクルスの一環で、「交響曲第8番」を明るく歌心と劇的なポリフォニーで聴かせ、コンサートマスターの美しい音色をはじめ、人の声のように繊細な弦の響きと純粹なユニゾンが特筆に値する。9月16日までの3夜連続公演後、9月17日はリートベルク美術館に舞台を移し、館長やキュレーターとの対談を通して、細川氏は自身の作曲過程と書の共通点を語り、チューリヒ芸術大学の学生が《書（カリグラフィ）》―弦楽四重奏のための6つの小品―を演奏した。

次の週もトーンハレ管の熱気は続き、9月21、22日にはニールセン「仮面舞踏会」序曲のあと、ヒラリー・ハーンをソリストに迎え、シベリウス「ヴァイオリン協奏曲」で客席を最大限の集中力で包み込んだ。一音一音が詩の一句一句のように意味のある粒ぞろいの音をつなげながら、深い音でドラマを語っていくハーンに、共鳴する弱音を響かせるオーケストラは、まさしく「協奏」と言える秀逸な共演者だった。アンコールのJ・S・バッハではその緊張感を解き、自然に呼吸するようなヴァイオリンを聴かせ、あまりの至福感に、後半のプロコフィエフ「交響曲第5番」は、耳に心地よく流れていっただけだった。

9月24日にはヨーロッパ文化賞授賞式がトーンハレで開催され、赤じゅうたんの上を女優のクラウドディア・カルディナーレら受賞者が入場して行った。トーンハレ管も受賞団体としてロッシニ「ウィリアム・テル」序曲を演奏したほか、プリンス・ターフェル（Br）のワグナー「タンホイザー」から「夕星の歌」やソル・ガベッタ（VC）のチャイコフスキー「エフゲニー・オネーギン」から「レンスキーのアリア」のチェロ版、カミラ・ニールント（S）のR・シュトラウス「歌曲《明日》」、ナイジェル・ケネディ（Vn）の坂本龍一「メリークリスマス・ミスターローレンス」そしてバンクバンド、トータンホーゼンまで伴奏した。

9月25日は、スイス・ツアーにきたミューンヘン・フィルハーモニー管弦楽団を聴いた。首席指揮者ヴァレリー・ゲルギエフに続き、コンサートマスターのローレンツ・ナストウリカ・ヘルシニコヴィツも解雇されるといふスキャンダルのため、宣伝に力を入れられなかったのか、空席が目立つトーンハレだったが、副コンサートマスターの席にはミュンヘン・フィル初の女性コンサートマスター、青木尚佳が座り、ラフ・シャニの棒でドヴォルジャーク「序曲《謝肉祭》」から演奏する喜びを体現した。チヨ・ソンジンを迎えたラヴェル「ピアノ協奏曲」も自由な楽しさを謳歌。アンコールではチヨが現在も続く侵攻への怒りと重ね合わせるように、シヨパンの《革命》

を叩き弾いた。後半のベルリオーズ《幻想交響曲》も迫真の音楽的描写で、断頭台のシーンのあと、聴衆の一人が具合が悪くなつて倒れたときには、バルコニーから生首が落ちて来たかと思つたほどだ。トーンハレ管は、今シーズンの定期会員制を廃止し、演奏会ごとにチケットを売りさばかなければならないというが、少ない聴衆でも満席のような拍手を浴びた。

チューリヒ歌劇場《ワルキューレ》

9月18日、チューリヒ歌劇場は今シーズンの初プレミエをワグナー「ワルキューレ」で迎えた。アンドレアス・ホモキ総裁の演出はあいかわらずだが、ジャンナンドレア・ノセダの指揮するフィルハーモニア

チューリヒ（チューリヒ歌劇場のオーケストラ）は格段成長した。とくに首席奏者のクラウドイウス・ヘルマン率いるチェロが美しく、各所で泣かせる。ジークムントのエリック・カッター、ジークリンデのダニエラ・ケラー、ブリュンヒルデのニールントらもハイ・レヴェルだが、ヴォータンのトマス・コニエチューニーは安心の歌唱力の上に父親の機微も表現し、最後のシーンではリゴレット&ジルダなみに涙を誘った。

その他のニュース

ゲサ・アンダ財団は9月1〜8日、ミハイル・プレトニョフを迎え、弾き振りのマスタークラスを開催し、チャイコフスキー国際コンクールで曲順を間違えられた安天旭、当財団コンクール優勝者アントン・ゲルツエンベルク、ウクライナのデイナラ・クリントン、今回のオーケストラ賞と聴衆賞をダブル受賞したロシアのアンナ・チブレヴァの4人がルツェルン交響楽団を弾き振りして学んでいく様子を、YouTubeとライヴのハイブリッドで公開した。

ジュネーヴ国際音楽コンクールでは、中橋祐紀が作曲のファイナリストに、進藤実優がピアノのセミ・ファイナリストに選ばれた。スイス・日本協会の招へいで北之台音楽アンサンブルがチューリヒ、ベルン、ジュネーヴで4公演を行い、日理が歌う日本の歌や、雅楽の音色が偶然、冒頭の細川俊夫の世界と共鳴した。



チューリヒ歌劇場、今シーズン初のプレミエ《ワルキューレ》から。ジークムント役のケーラー（左）とブリュンヒルデ役のニールント（右） © Monika Rittershaus